



好評につき
H21年6月号
再掲載



『子供をゆがませる間取り』

新潟少女監禁事件

充実しすぎた子供部屋による「自立失敗型」

事件概要

佐藤宣行受刑者が小学4年生の少女をナイフで脅し、車のトランクに詰めこんで誘拐したのは、1990年11月13日のことでした。

誘拐現場から約50キロほど離れた新潟柏崎市まで車を走らせた佐藤受刑者は、同居していた母親に気づかれぬよう、外から直接部屋に行ける階段を使って少女を2階の部屋に連れ込みました。そして、9年2ヶ月の間、佐藤受刑者は少女を監禁しつづけたのです。

2001年1月28日に保護されたとき、少女は19歳になっていました。監禁中、佐藤受刑者はスタンガンをおしあてて放電したり、「お前の母親やお姉ちゃんも連れてくるか」などといって少女を脅すこともあったとされています。

少女に与えられていた食事は一日一回。入浴は9年間で1回だけ。それもシャワーを浴びさせただけだったと言います。少女はベットから降りることを許されず、手足を伸ばしたり、足踏みをすることで運動不足を補っていたようですが保護されたときは自力で歩くことが出来ない状態だったとされています。

解放後に收容された病院ではスポーツドリンクをもらって飲み、「世界一おいしい味だと思った」そうです。この一言からも事件の痛ましさ伝わってきます。



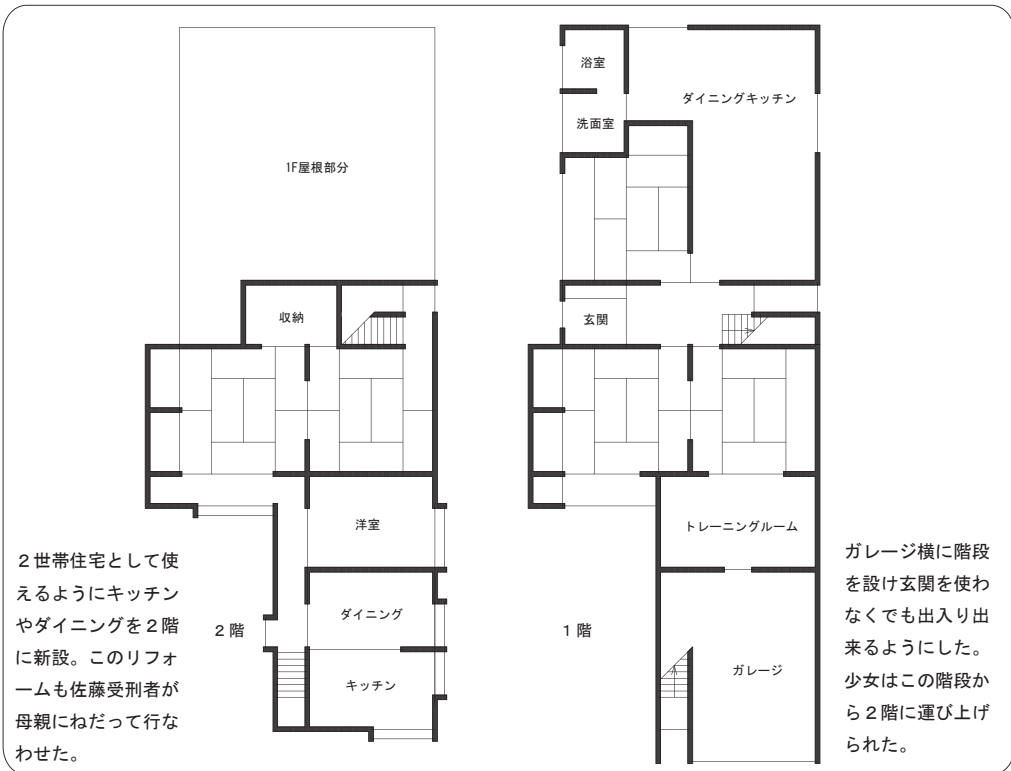
間取り

少女を誘拐する5年前に増築が施されています。増築で1階部分にはガレージとトレーニングルーム、2階には洋室とダイニング、そしてキッチンが新たに設けられました。後に大きな問題となるガレージ横の階段も、この時につくられました。2階にキッチン設けたのは、2世帯住居を想定しての事だったのでしょう。計画では、母屋に別棟を合体させる工事だったのですが、佐藤受刑者が2階の自室に作業員を入れさせなかったため、もともとあった2階の和室と、新しい洋室の室内はつなぐ事が出来ませんでした。しかし間取りの問題は増築以前からあったと思われる。2階には東西に部屋が並んでいるのですが、西側は仏間であったため、東側の部屋を佐藤受刑者が使っていました。ただ仏間に行くには佐藤受刑者の部屋を通らなければならない、自分の領域を守ろうとする子供にとって、ストレスになります。

1階部分においては、玄関から突き当たりの階段までを結ぶ廊下が、茶の間とダイニングを分断する構造になっている為、廊下は日中でも暗く、ダイニングも日が当たらない暗い部屋になっています。

さらに玄関から階段までの動線がほぼ直結していることも問題です。帰宅した子供は親と顔をあわせることなく2階に上がることができるので、家族間の自然なコミュニケーションは損なわれていたと考えられます。

増築後、佐藤受刑者は2階にできた新しい洋室を自分の部屋として使っていました。入りはガレージ脇の階段を主に利用していたようです。



まとめ

62歳の父親と36歳の母親の間に生まれています。父親は再婚でした。母親は、遅くにできた子供だったためか、息子を甘やかし、欲しがるものは何でも、買い与えていたと言われています。

いずれにせよ、両親が溺愛されて育った佐藤受刑者ですが、中学生の頃から、自室に引きこもるようになり、両親に暴力を振るうようになり、父親は息子の暴力に耐えかねて、家を飛び出してしまいます。

誘拐・監禁事件の動機は、「可愛かったから」「さびしかったから」という自己中心的なものでした。しかし、少女を連れ去るためには自動車、監禁するためには排他的な空間が必要です。

言われるがままに車を買って、独立した部屋が欲しいとせがまれて家を増築したのは母親でした。「逃げるな」と脅すために用いられたスタンガンは、息子に頼まれて母親が購入したものです。

「2階に上がるな」と命令されれば従順にしたがい、疑うことはあったにせよ、9年2ヶ月の間、自宅の2階を「犯行現場」として提供してしまったのも母親でした。この流れはおそらく、子供部屋を与えられたときからはじまっていたように思われます。無責任な親が、無分別な子供にモノを与えつづけた結果としてこの事件が起こされたとするならば、見直されるべきは子供の心ではなく、親の役割なのではないでしょうか。

